

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

根来塗を復元、日常の食卓へ

松江 那津子 和歌山県／根来塗師

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりに挑戦

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家)／東京大学教授、ゲエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)／アート・プロデューサー、下川一哉氏(意匠・匠研究所)らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。



エリア・コンサルティングにて左：生駒氏、右：松江さん

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。本当に欲しいくなるプロダクトか? 「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポート

メンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。



1月18日、プレゼンテーションにて

広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出すとして、このプロジェクトのプラン思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。今回は、和歌山県選出の匠、根来塗師・松江那津子さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

何十年も気軽に使える漆器を提案

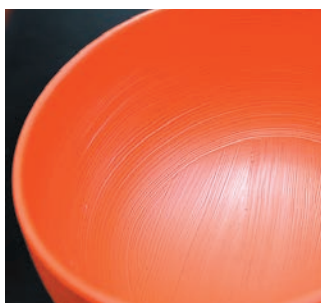
漆器というと他の食器とは別に洗って、そつと拭いて食器棚にしまうというイメージだが、中世の技法を使った根来寺根来塗の漆器は江戸期以降の漆器とは別物で、熱湯を入れても大丈夫、食洗機も使える。下地が丈夫なため剥離



完成プロダクト「根来寺根来塗 眉間寺三ツ椀 角切折敷 箸」

や欠けがほとんどなく、表面が擦れてくると朱漆の下に塗った黒漆が見えるようになり、独特の雅味が出る。塗り肌にも刷毛目を残すのが特徴で、そのために傷がついてもそれが趣となる。さらに、使えば使うほど艶が増すという、まさに日常使いで一生使える美しい漆器だ。

この根来寺根来塗の漆器を毎日の食事に使ってもらい、そのすばらしさを多くの人に知ってほしいと願う松江さんは、三ツ椀と角切折敷、箸を制作。「きれいに重ね合わせるために、下地を均等に塗る高度な技術が要求される三ツ椀に挑戦しました。これまでは人工の辰砂(朱色の顔料の鉱石)を使っていましたが、今回は師匠の許しを得て高価な天然の辰砂を使いました」と、二つの挑戦を果たした。プレ・プレゼンテーションでサポートメンバーの生駒氏から「価格を下げる工夫を」というアドバイスがあり、下地の工程を簡略化して価格を抑える工夫をした。「このプロジェクトに参加し



刷毛目を残すのが特徴

自分らしさの出る作品を

松江さんは和歌山県岩出市で開催されていた市民講座に参加して、日常的に使える根来寺根来塗の漆器に魅せられた。その後、そのプロを養成する講座を受講した松江さんは、講師だった和歌山県唯一の根来寺根来塗正統伝承者・池ノ上曙山氏に弟子入りする。

木材が豊富な和歌山県では、時代とともに変化しながらも漆器産業が続いてきた。しかし、紀州漆器のルーツである根来寺根来塗は中世以降400年以上途絶えていた。松江さんの師匠はこの伝統技術の復興に尽力し、後継者育成にも力を入れており、根来

寺に隣接した「岩出市民俗資料館」に工房を構えている。弟子入り後は松江さんもこの工

房に通い、自身の作品の制作に励んでいる。また、市民講座の講師として根来塗の制作指導をするなど、根来寺根来塗を地域に根付かせることにも力を注いでいる。



黒漆の下地に朱漆を重ねて仕上げる

匠プロジェクトで初めて、天然の辰砂を使った三ツ椀に取り組み、粘り気の強い下地を塗るための木ペラを自分で作るなど、挑戦する面白さと難しさを知った松江さん。「今後は、器の形や刷毛目などに女性らしさ、自分らしさが出る作品を作りたい。三ツ椀よりも高度な技術が



根来塗発祥の地、根来寺



松江 那津子 和歌山県／根来塗師

和歌山県海南市出身。大阪府立大学農学部で樹木の勉強をし、根来塗に魅せられ独学。和歌山県根来の根来塗発祥の地「総本山根来寺」にて、根来寺塗師 池ノ上曙山氏に師事。根来寺根来塗の真髄を学ぶ。岩出市伝統伝承事業根来塗講座 上級を首席で修了。現在、和歌山県伝統工芸根来寺根来塗において岩出市伝統伝承事業根来塗講座 講師として活動する傍ら、根来の地で根来塗作品を制作。



工房のある岩出市民俗資料館

要求される五ツ椀も制作したい」という。これまでは師匠の展示会で作品を発表してきたが、和歌山県代表になったことで、近鉄百貨店和歌山店の画廊で4月27日から5月2日まで松江さんの作品展が開催されることになった。根来塗師になって5年。松江さんの新しい挑戦が始まる。



展示ブースでバイヤーと話す松江さん



作品をプレゼンする松江さん

て、周りの方々から多くの助言をいただき、独りよがりでない作品が作れたことが大きな収穫でした。赤い漆器があると食卓が華やきます。大きめの椀に白いご飯を盛って余白を染しんだり、熱い汁を入れて漆器の手触りを味わったりしてほしい」という松江さん。今後も根来寺根来塗の復興のために、塗師としての腕を磨いていきたいという。